

「存在」とは何か？

— ‘exist’ の冗長説 —

What is existence?: redundancy theories of ‘exist’

加藤 雅人

Masato Kato

Ontological problems are almost as old as philosophy itself. But in the 20th century they seemed to have been finally dissolved by so called analytical philosophers like G. Frege, B. Russell, and W.V. Quine. They are largely unanimous in the view that to admit ‘exist’ as a first level predicate would lead to the absurdity of regarding existence as a property on one hand, and to the paradox generated by negative existential propositions on the other. Their views, which are named by B. Miller ‘redundancy theories of “exist”’, are roughly and critically sketched in this paper.

キーワード

存在、メタ存在論、言語分析、exist、be

はじめに

「存在論」は、哲学の歴史において 2500 年の伝統を持つ論争テーマの 1 つであるが、〈存在論〉‘Onto-logia’¹⁾という呼び名そのものは比較的新しい（17 世紀の）造語である（MacIntyre, 1967, pp. 542-3）。その語が造られて以後 20 世紀まで、存在論はスコラ哲学の学派以外ではあまり関心を引かなかった。しかし、20 世紀になって存在論は、分析哲学においても、存在-現象学においても、主要なテーマとなった。分析哲学における流行は、クワインが「存在論的問」（ontological question）と呼んだ問題、すなわち「何が存在するのか？」（What is there?）という発問²⁾による影響が大きく、存在-現象学における流行は、ハイデガーが言う「オンテッシュ（存在者的）」（ontisch）な問において忘却されている「オントロギッシュ（存在論的）」（ontologisch）な問題、すなわち「存在（有）である限りの存在（有）」（ens inquantum ens）への注意喚起³⁾による影響が大きい⁴⁾。

さて、21世紀の現在、インワーゲンは、基本的にクワインの伝統に立ちながら、クワインが「存在論的」と呼んだ「何が存在するのか？」(What is there?)という問に加えて、「有とは何か？」(What is being?)という問を立て、自身の論を〈メタ存在論〉‘meta-ontology’と呼んだ(Inwagen, 2014, p. 52-53.)⁵⁾。本稿においてわれわれが考察するのも、「存在とは何か？」(What is existence?)という問いであり、インワーゲンの言う「メタ存在論」に当たるものである。インワーゲンの立場は基本的にクワインの系譜に属し、それは歴史的にフレーゲ、ラッセルの系譜に属する立場であり、後に述べるように、彼らは‘exist’という語を冗長 (redundant) と見なす立場である。本稿においては、「‘exist’の冗長説」を中心に主要な論点を俯瞰的・批判的に展望する。

1. 「存在とは何か？」を説明することは難しい

「存在すること」は、「笑うこと」「悲しむこと」と同様、特別なことではないように思われる。たとえば、‘Maria is laughing.’や‘Maria feels sad.’と言うとき、マリヤの知人にとってそれは意味を持つかもしれない。しかし、‘Maria exists’は、マリヤの知人にとっては情報性はなく、マリヤを知らない人にとっては、「だから、何？」という戸惑いにすぎないだろう。また、「笑うこと」「悲しむこと」がどういうことかを我々は知っているが、「存在すること」とはどういうことなのか？そもそも「存在すること」には、「特定の時空間にあること」や「生きていること」に言い換えられない特別な意味があるのか？もしあるとしても、それが何を意味するのかを説明することは非常に難しいように思われる。

ところで、‘Maria exists’が意味するのは‘Maria is real’であると考えられるかもしれない。ミラーによれば (Miller, 2009)、『real』は、従来〈排除詞〉‘excluder’と呼ばれてきたものである。これによれば、『is real』は、マリヤに肯定的な属性を何も与えず、マリヤから‘is imaginary, mythical, fictional etc.’を排除するという、純粹に否定的 (排除的) な仕方でのみ機能する。したがって、『exists』が‘is real’を意味するということは、『exists』はマリヤに肯定的な属性を何も与えないということになる。しかし、この説明に我々は納得できないだろう。というのも、『is real』によって排除される否定的述語のなかには、『not imaginary』、『not mythical』、『not fictional』だけでなく、『not non-existent』も当然含まれるからである。たとえば、ある占い師が、Masato と Akemi に2年後1人の娘が生まれ、その子は‘Maria’ と命名されるだろうと予言したとする。その予言が現実化したとき、その占い師は得意げに‘At last Maria exists, exactly as I predicted she would’ と自慢するかもしれない。もし『exists』が‘is real’と同じ排除詞なら、その言葉はマリヤから肯定的な何らかの属性を排除しているはずで、この場合、排除された属性の中に「非存在」が含まれることになる。すなわち、もし‘At last Maria exists’が‘At last Maria is real [not non-existent]’を意味するなら、その‘exists’や‘is real [not non-existent]’によって排除される

べき「非存在」(non-existence)という属性を、そもそも彼女はいつい何時持っていたのか、と問わなければならない。彼女が存在し始める以前、彼女は‘Maria’と名指されることさえできず、いかなる属性(非存在さえ)も与えられてはいなかったはずである。したがって、彼女が存在し始める以前、‘Maria is non-existent’は無意味であった。‘Maria is non-existent’が無意味なら、その否定形‘Maria is not non-existent’も無意味である。それゆえ、‘exists’は‘is real’へと置き換えても理解されることは困難である。

もちろん、‘exists’を‘is real’以外の表現に置き換え、‘What is existence?’という問いの立て方そのものを否定することも可能であるかもしれない。もし人が、‘exist’という語を言語体系から削除して別の表現(たとえば‘subsist’)で代替することができると思えるなら、「存在」という属性を排除することができるだろう。しかし、もし人が、‘exist’はそんな風に削除することはできないと思えるなら、‘What is existence?’という難問を追及し続けることになるだろう。

2. ‘exist’の「冗長説」

以上のように「存在とは何か？」を説明することは難しいので、‘What is existence?’という問は、しばしば動詞‘exist’の用法についての問、すなわち‘What does “exist” mean?’へと置き換えられる⁶⁾。これについて、フレーゲ、ラッセル、クワイン等によって普及した説を、ミラーは‘exist’の「冗長説」(‘redundancy theory’)と呼んだ(Miller, 2002, p. 10)。以下、この「冗長説」について見ていくことにする。

2.1 Frege (1848-1925) さて、いくつかの言語において‘be’は‘exist’の意味を持ち、英語においても、「存在」の意味をもった‘be’の用法がある。それゆえ、存在について論じるとき、‘be’と‘exist’の関係についても論じなければならない。これに関して、現代の分析哲学系の哲学者たちの間で支配的な見解は次の2つの論点に要約される。第1の論点は、フレーゲ的な‘be’の4つの異なる用法の区別である。すなわち、

- 「存在 (existence) の ‘be’」 e.g. ‘There are dragons’: $\exists x Dx$, または ‘Socrates is’: $\exists x (x = s)$
- 「同定 (identification) の ‘be’」 e.g. ‘Cicero is Tully’: Cicero = Tully
- 「述定 [叙述] (predication) の ‘be’」 e.g. ‘Socrates is wise’: Ws
- 「類的含意 [包含] (generic implication [inclusion]) の ‘be’」 e.g. ‘Man is an animal’:
 $\forall x (Mx \Rightarrow Ax)$

この見解によれば、‘be’の異なる用法は(存在の‘be’も含めて)各々に対応する異なる意味を論理的に内含し(entail)、それら多様な意味は共通点がまったくないほど異なっている。言い

換えると、それらの意味は「偶然的に多義的」(casually ambiguous)であって、アリストテレスやアクィナスが考えたように「体系的に多義的」(systematically ambiguous)すなわち「類比的」(analogical)ではない(Miller, 2002, pp. 3-5)。

分析哲学者たちの第2の論点は、〈存在は述語ではない〉‘Existence is not a predicate.’という有名な文によって表される。謎めいたこの文は何を意味するのか？ムーアによれば(Kneale & Moore, 1936, pp. 176-7)⁷⁾、‘Existence is not a predicate.’と言われる時、その文は、‘existence’という名詞が表層的に指している「存在」という属性についてではなく、深層的には‘exist(s)’または‘to exist’のその他の定形(e.g. ‘existed’, ‘will exist’)といった「語」についての命題を表す。また、‘a predicate’は、文法的意味(grammatical sense)ではなく論理の意味(logical sense)において使用されている。すなわち、「‘Existence is not a predicate.’が意味するのは、‘exist(s)’, ‘existed’, ‘will exist’などの語は、論理の意味において述語ではない」ということである。ニールによれば(Kneale & Moore, 1936, pp. 176-7)、「論理の意味における述語」とは、「属性」(attribute)を表す。したがって、「論理の意味における述語ではない」ということは、「属性を表わさない」ということである。たとえば、‘Socrates is wise.’において、‘is wise’は文法的にも論理的にも述語であり、主語に帰属されるべき属性を表わしている。また、‘Tame tigers growl.’や‘Rajah growls.’における‘growl(s)’も属性を表わしている。しかし、‘Tame tigers exist.’や‘Socrates exists.’における‘exist(s)’は属性を表していない、ということである。

このことを明らかにするために、ムーアは、‘Some tame tigers don’t growl.’と‘Some tame tigers don’t exist.’を比較し分析する(Kneale & Moore, 1936, pp. 176-7)。「Some tame tigers don’t growl.’は、‘There are some tame tigers, which don’t growl.’と同じことを意味し、‘Some tame tigers do growl.’、すなわち‘There are some tame tigers, which do growl.’と同様、明解な意味を持っている。そして、明らかに、これら2つの否定と肯定の文は同時に真となりうる。しかし、‘Some tame tigers don’t exist.’の場合、事情は異なる。肯定文‘Some tame tigers do exist.’には明解な意味がある。それはまさに、‘There are some tame tigers.’を意味する。しかし、否定文‘Some tame tigers don’t exist.’は奇妙な表現である。そもそも、この文に意味があるのか？もし意味があるなら、それは‘There are some tame tigers, which don’t exist.’を意味するはずであるが、この文は矛盾を含む。もし、‘Some tame tigers don’t exist.’という文において、‘exist’という語が、‘Some tame tigers do exist.’の場合と同じ意味で用いられている(はずである)なら、‘Some tame tigers don’t exist.’は、まったくのナンセンスである。

それゆえ、‘Some tame tigers growl.’における‘growl’の用法と、‘Some tame tigers exist.’における‘exist’の用法の重要な違いは、前者の場合、‘growl’の意味を変えずに有意味な否定文(‘Some tame tigers don’t growl.’)が得られるのに対して、後者の場合、‘exist’の意味を変えずに否定すると無意味な文(‘Some tame tigers don’t exist.’)しか得られないということである。これは、一般に、否定の存在命題が陥る矛盾(paradox)の一つである。このタイプの矛盾を

避けるためには、そもそも ‘exist’ を述語とみなすべきではない、すなわち、「存在は述語ではない」という主張が、20世紀の分析哲学の系譜において趨勢となった。この考え方に大きな影響を与えたのはフレーゲである(加藤、2017、I)。

フレーゲによれば、「存在は述語ではない」ということは、正確には「存在は第1階の属性ではない」や「‘exists’は第1階の述語ではない」と言われるべきである。彼によれば、概念もまた述語の指示対象である。ある種の述語は「単称(個体を指示する)名辞」(singular term)と結合して命題を構成し、「個体」について何かを語る。たとえば、‘Socrates is wise’。この文の述語 ‘is wise’ は「第1階述語」(first-level predicate)と呼ばれ、「第1階概念」(first-level concept) — この場合は「知恵 [賢いこと]」(wisdom [being wise]) — を指す。別のタイプの述語は、単称以外の名辞と結合して命題を構成し、その名辞が指示する「概念」(第1階)について何かを語る。たとえば、‘Wisdom is rare’。この文の述語 ‘is rare’ は「第2階述語」(second-level predicate)と呼ばれ、「第2階概念」(second-level concept) — この場合は「希少性 [希であること]」(rarity [being rare]) — を指す。そして、フレーゲは「存在」を第2階概念とみなした(加藤、2017、II; cf. Miller, 2002, pp. 3-9)。

フレーゲは、『算術の基礎』において、存在は個体の属性ではなく概念の属性であるという説を提示する(Frege, 1884a, SS. 63-64)。たとえば〈4頭の純血種の馬〉(‘four thoroughbred horses’)という表現において、〈純血種の〉(‘thoroughbred’)や〈馬〉(horse)という概念は個々の馬が持っている属性を表すが、〈4頭の〉(four)は、個体ではなく概念について語っている。つまり、この場合〈純血種の馬〉という概念について、そのような個体が4頭いることを表している。数4は、個々の馬の属性ではなく、〈純血種の馬〉という概念の属性である⁸⁾。フレーゲによれば「存在は数に似て」おり、したがって、数と同様「存在は概念の属性であり」⁹⁾、その概念の傘下にある対象の属性ではない。

「存在」や「数」は、「純血種の馬」のように個体の属性を表す概念(第1階)ではない。それらは、概念(第1階)の概念(つまり第2階)なのである。たとえば「地球の衛星」や「太陽系の恒星」といった概念(第1階)は、その傘下にただ1個の対象(個体)しかないという属性をもっている。そのような概念をすべて集めてくれば、「その傘下にただ1個の対象(個体)しかない第1階概念の集合」という、「一性」(oneness)を特徴とする高次階(第2階)の概念がうまれる。この第2階概念「一性」の傘下には、当然ながら「地球の衛星」や「太陽系の恒星」という第1階概念は属しているが、個体としての月や太陽は属していない。このように、「一性」つまり数1は、概念の概念、つまり第2階概念なのである。同様に、その傘下に1個以上の対象(個体)が属する第1階概念(たとえば「人間」や「馬」や「野菜」)をすべて集めれば、「その傘下に1個以上の対象(個体)が属する第1階概念の集合」という高次階(第2階)の概念がうまれる。この場合、集められた第1階概念の傘下には必ず1個以上の対象(個体)が属するので、集められた第1階概念は共通して(傘下の対象が)「1個以上あること」つ

まり「存在」(existence)という属性を持っている。以上のように、「存在」や「数」は、第1階概念を傘下におく第2階概念であり、概念(第1階)の概念(第2階)なのである(cf. 加藤、2017、pp. 39-40)。

以上のように、フレーゲは、「存在」は個体の属性ではなく概念の属性であると説明することによって、たとえば「4頭の純血種の馬が存在する」(‘There are four thoroughbred horses.’ / ‘Four thoroughbred horses exist.’)のような、概念語を主語とする「一般存在命題」(general existential propositions)の性格を明らかにした。では、固有名や個体を指示する表現を主語とする「単称存在命題」(singular existential propositions)について、フレーゲはどのように分析するのか? 彼は、『存在に関するピュンヤーとの対話』¹⁰⁾において、「レオ・ザクセが存在する」(‘Leo Sachse exists’)は、レオ・ザクセ(個体)についてではなく、‘Leo Sachse’という語(固有名)についての命題であると主張する。フレーゲはまず、「一人以上の人間がドイツ人である」(‘Some men are German.’)は、「ドイツ人が存在する」(‘There are German men.’)と同意であることを確認した上で、「ザクセは人間である」(‘Sachse is a man.’)と「ザクセはドイツ人である」(‘Sachse is a German.’)から、「一人以上の人間がドイツ人である」(‘Some men are German.’)や「ドイツ人が存在する」(‘There are German men.’)が論理的に導出できるように、「ザクセは人間である」(‘Sachse is a man.’)から「人間が存在する」(‘There is a man.’)を導出できると主張する。

これに対して、論敵ピュンヤーは、まずフレーゲの前提を否定する¹¹⁾。すなわち、「一人以上の人間がドイツ人である」(‘Some men are German.’)は、「ドイツ人が存在する」(‘There are German men.’)と同意ではないとし、その上で、「ザクセは人間である」(‘Sachse is a man.’)から「人間が存在する」(‘There is a man.’)を導き出すためには、「ザクセが存在する」(‘Sachse exists.’)という命題が必要である、とする。

ピュンヤーへの反論において、フレーゲは、「ザクセが存在する」(‘Sachse exists.’)は、レオ・ザクセ(個体)についてではなく、‘Leo Sachse’という語(固有名)についての命題であると主張する¹²⁾。まず、ピュンヤーの主張する必要条件「ザクセが存在する」(‘Sachse exists.’)は、その文が「語‘Sachse’は空虚な音ではなく、何かを指示する」という意味においてのみ正しい。しかし、このことは「自明な前提」(selfevident premiss)である。文において使用される語が空虚ではないことは、つねに論理的前提である。したがって、フレーゲによれば、ピュンヤーの要件は「余分 [冗長]」(überflüssig / superfluous)なのである。このように、フレーゲは、存在を第2階概念とみなすとき、存在が第1階概念であることを否定するだけでなく、同時に‘exist’が第1階述語であることも否定する。‘Sachse exists’という命題はザクセ(個体)に何の属性も与えていない。‘exists’は第1階述語ではないのである(cf. Miller, 2002, pp. 7-8)。

2.2 Russell (1872-1970) & Quine (1908-2000) ‘Leo Sachse exists’ は「レオ・ザクセ (個体) の存在」という属性についてではなく、「‘Leo Sachse’ という語 (固有名)」についての命題であるというフレーゲの主張は、ラッセルやクワインによって補強された。彼らに共通の戦略は、個体を指示するとされる固有名を、主語としてではなく述語として解釈することであった。ラッセルは、‘Dragons exist’ のような一般的存在命題を「命題関数 ‘is a dragon’ は少なくとも1回満たされる」すなわち $\exists x (x \text{ is a dragon})$ と解釈する。そして、ラッセルは ‘Socrates exists’ のような単称存在命題も同様に分析する。固有名は「偽装された記述」(disguised descriptions) であるというラッセルの見解によると、‘Socrates exists’ は ‘The teacher of Plato exists’ へと解釈され、さらに「まさに1個体だけがプラトンの教師である」(‘Exactly one thing is a teacher of Plato’) や「命題関数 ‘__ is a teacher of Plato’ は、まさに1回だけ満たされる」へと、すなわち $\exists x (Fx \wedge \forall y (Fy \Rightarrow (x = y)))$ (Fx : x is a teacher of Plato) へと変換される。これは最早、‘Socrates’ についての命題という外見すらない。このようにして、単称存在命題はすべて、一般命題と同類とみなされ、あらゆるタイプの命題における ‘exists’ の出現はすべて第2階とみなされる。その結果、「存在とは何か？」は問題ではなくなる。なぜなら、存在は個体の属性ではなく、「命題関数の属性」、すなわち「まさに1回だけ満たされること」に過ぎなくなるからである (cf. Miller, 2002, p. 40)。

他方、クワインは、‘Pegasus exists’ について次のように言う。

ペガサスという概念が、非常に曖昧で非常に基本的な概念であるため、記述的表現への適切な翻訳が馴染みある仕方では与えられないとしても、それでもなお、次のような人工的な一見些細な工夫が役に立つだろう：我々は、‘is-Pegasus’ や ‘pegasizes’ という動詞をその表現形式として採用することによって、仮説上 (*ex hypothesi*) 分析不可能で還元不可能な、ペガサスであること (*being Pegasus*) という属性に訴えることができたろう¹³⁾。

こういうわけで、‘Pegasus exists’ は、‘Something is-Pegasus’ すなわち ‘ $\exists x (x \text{ is-Pegasus})$ ’ や、‘Something pegasizes’ すなわち ‘ $\exists x (x \text{ pegasizes})$ ’ へと言い換えられる。同様に、‘Socrates exists’ も、‘Something is-Socrates’ すなわち ‘ $\exists x (x = \text{Socrates})$ ’ や、‘Something socratizes’ すなわち ‘ $\exists x (x \text{ socratizes})$ ’ と変換されることになる (Quine, 1960, p. 179)。

‘Socrates exists’ についてのラッセルの解釈 (‘Exactly one thing is a teacher of Plato’) や、クワインの解釈 (‘Something is-Socrates’ や ‘Something socratizes’) の目的は、単称存在命題における主語の固有名を削除することであり、主語 ‘Socrates’ を、‘= Socrates’, ‘is a teacher of Plato’, ‘socratizes’ といった述語に変換することによって、‘Socrates exists’ の表層 (文法) 上の外見とは違って、その深層にある論理形式は、ソクラテス (個体) について何も語っていないことを示すことであった。フレーゲ、ラッセル、クワイン等によって普及した以上のような

見解、すなわち‘Socrates exists’における‘exists’はソクラテス（個体）の属性について何も語っておらず、つまり第1階述語ではなく、また一般に、単称存在命題はつねに‘exists’や‘is’の第1階用法をまったく含まない形式へと変換可能であるという考え方を、ミラーは‘exist’の「冗長説」（‘redundancy theory’）と呼ぶのである（cf. Miller, 2002, c. 1 p.10）。

3. ‘exist’の「冗長説」を支持する論

ミラーによれば（cf. Miller, 2009）、論理実証主義の全盛期、アルフレッド・エイヤーは、もし仮に‘exist’が述語であり、存在が属性であるなら、「すべての存在命題は同語反復（tautology）であり、すべての否定存在命題は自己矛盾的（self-contradictory）であるということが帰結するだろう」と主張した（Ayer, 1947, p.43）。単称存在命題と一般存在命題を区別する必要はなく、一般存在命題をさらに全称（universal）命題と特称（particular）命題に細分する必要もない。‘exist’がどんな命題において出現しても、‘exist’を述語と認めると、一方で存在を属性とみなす不合理が帰結し、他方で否定存在命題から生じる矛盾を帰結することになるという主張である。存在を属性とみなす不合理は、もし存在が属性なら非存在もまた属性であることになるという想定に基づく。そのことから、デイヴィッド・ランディーは、「存在している羊と存在していない羊を区別する—存在の印を探す—ために毎日自分の群れを調査する羊飼いの不合理」（the absurdity of a farmer who daily inspected his flock with the aim of sorting the existing from the non-existent ones — searching for the stigmata of existence）を指摘している（Londey, 1970, p.3）。またそのことから、C.J.F. ウィリアムズは「青いキンポウゲは存在しない」‘Blue buttercups do not exist.’と言われたとき、「青いキンポウゲ品種には存在が欠けている」‘As a variety blue buttercup lacks existence.’と結論するために青いキンポウゲの標本を調査しなければならぬのか、という問題を提起した（Williams, 1992, p.1）。

他方、否定存在命題から生じる矛盾は以下のことである。もし‘exist’が述語なら当然その否定‘do not exist’もまた述語である。ところが、もし‘do not exist’が述語なら、たとえば‘Dragons do not exist’のような一般命題において、それがドラゴンに真なる仕方で述語されるのはドラゴンが存在しない場合のみである。逆説的に言えば、そもそも‘do not exist’は、存在しないものについてしか述語されないことになる。この矛盾は、‘Socrates does not exist’のような単称命題についても当てはまる。ソクラテスが亡くなった後も、彼について語られうる真なる命題がある。たとえば、〈ソクラテスは哲学者（ギリシャ人 etc.）であった〉。しかし、もし‘does not exist’がソクラテスに述語されるなら、その命題が真となりうるのは、その命題が当てはまるべきソクラテスが存在しなくなってからしかないという逆説が生じる。さらに、矛盾の別形態として、もし‘exist’が個体の述語なら、それは現存するすべての個体に当てはまることになるが、‘do not exist’が当てはまる現存する個体は一つもないことになる。すなわち、‘Socrates

exists’のような肯定の単称存在命題はすべて真となり（同語反復）、‘Socrates does not exist’のような否定の単称存在命題はすべて偽となり、‘do not exist’はいかなるものの述語でもありえないことになる。そして、もし‘do not exist’が述語ではありえないなら、‘exist’もまた述語ではありえないことになるだろう。それゆえ、‘exist’が第1階述語であるという前提は、‘exist’は述語ではありえないという矛盾を帰結するのである¹⁴⁾。

ウィリアムズの主張によると、上記の矛盾の解決は‘exist’を第2階の「可能述語」(predicables)としてのみ認めることである (Williams, 1992, p. 40)。ウィリアムズは、まず「青いキンポウゲは存在する」‘Blue buttercups exist.’について、キンポウゲに‘exist’が述語されているということ否定する。同じことは「少なくとも1つのキンポウゲは青い」‘Some buttercups are blue.’によっても表現されるからである。しかし、‘Some buttercups are blue.’は、キンポウゲの「存在」について何も語ってはいない。それが肯定しているのは、「青いキンポウゲという類のものがある」‘There are such things as blue buttercups.’ということであり、「青いキンポウゲは存在しない」‘Blue buttercups do not exist.’が否定しているのは、「キンポウゲは1つも青くない」‘No buttercups are blue.’ということである。したがって、ウィリアムズによれば、「たとえ、『黒い白鳥が存在する』(there are black swans)、『公的支出の増加を支持する十分な議論が存在する』(there are good arguments for increased public spending)、『殻を割らずに卵を調理する方法が存在する』(there are ways of cooking eggs without breaking their shells)という事実があるとしても、黒い白鳥、公的支出の増加を支持する十分な議論、殻を割らずに卵を調理する方法によって共有されている属性が、『存在』(existence)や『有』(being)である」などと考えることは不合理だろう (Williams, 1992, p. 40)。だとすれば、「青いキンポウゲは存在する」‘Blue buttercups exist.’は何を意味するのか？ウィリアムズによると、その命題は「青いキンポウゲはいくつ存在するのか？」‘How many blue buttercups are there?’という問に対する答えである。その命題は「『少なくとも1つ(1つ以上)』存在する」‘There are “some (one or more)”.’と答えているのである。このことから、ウィリアムズは、‘exist’は、‘abound’や‘rare’や‘numerous’のような語と同じように、数表現するために用いられていると結論する。

さて、「青いキンポウゲは豊富にある [希少である/多数ある]’‘Blue buttercups abound [are rare/ are numerous].’の特徴は、その述語‘abound [are rare/ are numerous]’が青いキンポウゲに何の属性も帰属させないということである。そのことをより明らかにするために、その命題から無意味な結論「あるキンポウゲの個体 *b* が豊富にある [希少である/多数ある]’‘Some individual buttercup *b* abounds [is rare/ is numerous].’を推論することの非妥当性を考えればよい。そして、もし‘exist’がつねに、‘some’、‘abound’、‘rare’、‘numerous’と同じ数的表現にすぎないなら、「青いキンポウゲは豊富にある」‘Blue buttercups abound.’から「あるキンポウゲの個体 *b* が豊富にある」‘An individual buttercup *b* abounds.’を推論することが意味をなさない

ように、「青いキンポウゲは存在する」‘Blue buttercups exist.’から「あるキンポウゲの個体 *b* が存在する」‘An individual buttercup *b* exists.’を推論することは、何の意味もなさない。以上のケースにおいて、‘blue buttercups’は、キンポウゲの個体を指示する (refer to) のではなく、属性「青いキンポウゲであること」(being a blue buttercup) を指示すると見なされるべきである。そして、‘Blue buttercups exist.’によって語られているのは、たんにこの属性が、多数の個体において (‘Blue buttercups are numerous’の場合)、または一部の個体において (‘Blue buttercups exist.’ / ‘Some buttercups are blue.’の場合)、「例化 [具体化] されている」(instantiated) ということにすぎない。こういうわけで、‘Blue buttercups do not exist.’が語っているのはたんに、「青いキンポウゲであることという属性はいかなるものにおいても例化されていない」(the property of *being a blue buttercup* is not instantiated in anything) ということなのである。

明らかに、一般存在命題の論理構造についてのウィリアムズの結論は、フレーゲの系譜に属している。それは、‘Blue buttercups exist.’ / ‘Some buttercups are blue.’の論理構造を、 $\exists x (x \text{ is a buttercup} \ \& \ x \text{ is blue})$ として示すことである。この分析は、‘buttercups’が複数の物に共通の名前 (common name) としてではなく、‘is a buttercup’という述語として使用されているということである。しかし、‘Blue buttercups do not exist.’に関する上記の園芸家の矛盾は、「青いキンポウゲ」‘blue buttercups’が「個々の青いキンポウゲ」(individual blue buttercups) を指示する名前として使用されている場合のみ生じるが、「青いキンポウゲ」‘blue buttercups’は「青いキンポウゲであること」(being a blue buttercup) という属性しか指示しないのであるから、そこには矛盾はない¹⁵⁾。

ウィリアムズは、一般存在命題における‘exist’についての上記の論は単称存在命題については有効でないと認識していた。すなわち、「青いキンポウゲは多数ある」‘Blue buttercups are numerous’は有意味であるが、「ヘイルシャム卿は多数いる」‘Lord Hailsham is numerous.’は意味をなさないからである。そして、‘exist’を第1階述語とみなした場合の矛盾を避けるため、フレーゲ同様、ウィリアムズは、‘Lord Hailsham exists’はヘイルシャム卿 (個体) については何も語っておらず、ただ‘Lord Hailsham’という固有名 (語) について語っており、「それは虚構的 (fictional) ではなく実在的 (real) 個体を指示するために用いられている」とする (Williams, 1992, p. 34)。したがって、‘Lord Hailsham exists’という単称存在命題は、語についての命題であって実在する人物についての命題ではないのである。この理解によれば、その命題はヘイルシャム卿 (個体) についてであるという想定に基づいた矛盾は生じないだろう。

しかし、ギーチは、‘Lord Hailsham exists.’がたんに‘Lord Hailsham’という固有名 (語) についてであるという考え方に反論して、明らかにこれを偽とする聖書の例を提示した (Geach, 1969, pp. 42-64)。その例が、「ヨセフがいない、そしてシメオンもいない」‘Joseph is not and Simeon is not.’における、息子たちの死を悲しむヤコブの言葉である (Genesis, 42: 36)。ギー

チは「ヤコブがこれらの言葉を発するとき、ヨセフやシメオについてではなく、彼等の名前前の用法について語っていると言うことはばかげているだろう」(Geach, 1969, p. 58)と主張する。しかし、ウィリアムズはヤコブの言葉を‘Joseph no longer is and Simeon no longer is.’の省略形と解釈し(Williams, 1981, p. 146)、これらの命題が‘Joseph is’と‘Simeon is’を「埋め込んで」(embed)いると彼はみなす。たとえば、‘Lord Hailsham no longer exists.’や‘Lord Hailsham might never have existed.’といった命題は、その中に‘Lord Hailsham exists.’という単称存在命題が埋め込まれ、前者は‘It is no longer the case that (Lord Hailsham exists).’、後者は‘It might never have been the case that (Lord Hailsham exists).’という「埋め込み」単称存在命題として理解される。この場合、‘Lord Hailsham exists.’はそれらの埋め込み命題の論理的構成要素である。そして、それらの埋め込み命題は、明らかにヘイルシャム卿(個体)についての命題であり、彼の名前についてではない。しかし、それらの命題がヘイルシャム卿(個体)についてであるということは、‘Lord Hailsham exists.’という単称存在命題がその中に出現することからしか生じえない。だとすればここに、‘Lord Hailsham exists.’は名前についてではなく人物についての命題であるという明らかな実例がある。

ウィリアムズはこのことに同意する。‘Lord Hailsham no longer exists.’や‘Lord Hailsham might never have existed.’が「実在の(real)人間について真正に何かを語っている命題」であること、すなわちそれらは「名前についての命題ではなく、それらが帰属させる属性は類や概念の属性ではない」(Williams, 1981, p. 28)ということは認める。しかし、ウィリアムズは、ヘイルシャム卿(個体)について語られているのが‘exist’であることを否定するのである。というのも、それを否定しなければ、結局、矛盾を抱え込むことになるだろうからである。それゆえ、彼は以下の二つの主張を調停しなければならなかったのである。第1は、‘Lord Hailsham no longer exists.’や‘Lord Hailsham might never have existed.’は、たしかにヘイルシャム卿についての命題であり、一見それらの命題が卿について述語しているのは、‘exist’であるように見える、という主張である。第2は、‘Lord Hailsham no longer exists.’や‘Lord Hailsham might never have existed.’が、ヘイルシャム卿について‘exist’を述語することは、矛盾なしには不可能である。なぜなら、それが述語されるべきヘイルシャム卿がいないのであるから、という主張である。

明らかに、‘exist’の第1階述語の用法が削除されれば、何の矛盾も生じないだろう。それゆえ、ウィリアムズは第1階の存在述語のように見える‘exist’を、存在以外の述語に置き換える提案をした(Williams, 1981, pp. 28-33)。「再同定」(reidentification)のために必要となる一対の可能述語が存在しないことに置き換えるというものである。すなわち、対の一方は、ヘイルシャム卿の生前彼に真なる仕方です語されていた[彼を同定するための]可能述語で、対の他方は、彼の死後ある人に真なる仕方です語される[彼を再同定するための]可能述語である。こうして、‘Lord Hailsham no longer exists.’は、可能

述語のそのような対が存在することの否定と理解されなければならないと、彼は主張する (Williams, 1981, p. 33.)¹⁶⁾。

ウィリアムズは、‘Lord Hailsham no longer exists.’の場合と同様、‘Lord Hailsham might never have existed.’に関しても、‘exist’がヘイルシャム卿 (個体) について述語されていないような解釈を提案する。すなわちその命題は、「かつてヘイルシャム卿の本質的属性であったある属性が存在し、かつこの属性を所有したものが1つもなかったということが真であったかもしれない」と理解される (Williams, 1981, p. 30.)¹⁷⁾。明らかに、これは、「存在しないヘイルシャム卿を構成要素としなければならない事実が存在する」ということを含意していない。したがって、‘Lord Hailsham might never have existed.’という命題は、ヘイルシャム卿 (個体) についてではなく、卿の属性について語られている限りにおいてのみ、理解可能なのである。その場合、‘exist’はたんに第2階述語としてのみ出現しており、第1階述語としてではない、ということになるだろう。

もしウィリアムズが正しいなら、ヘイルシャム卿 (個体) について外見上何かを語っているように見える、‘Lord Hailsham no longer exists.’と‘Lord Hailsham might never have existed.’という2つの命題は、じつはヘイルシャム卿 (個体) については何も語っておらず、卿の属性の1つの「例化」について語っているだけなのである。すなわち、‘Lord Hailsham no longer exists.’は、‘There is no pair of properties of reidentification one of which belongs to someone now, the other of which did belong to Lord Hailsham during his lifetime’ということ語り、‘Lord Hailsham might never have existed.’は、‘There is an essential property which belonged to Lord Hailsham, and which might have belonged to no one’ということ語っているのである。要するに、ウィリアムズは、一般存在命題についても単称存在命題についても、基本的に同一の論点を主張している。まず第1に、否定存在命題は矛盾を生み出すということであり、第2に、矛盾の外見は、‘exist’を第1階述語とみなすという誤解から生じるということである。したがって、彼は、‘exist’は第1階述語として使われると理解する必要はなく、‘exist’は以下のような仕方で行われていると主張する (Miller, 2002, p. 31) :

- 一般存在命題 (*general existential propositions*)、たとえば ‘Blue buttercups do not exist.’ の場合、‘exist’は第2階述語であり、そのことの必然的結果として、その命題は個体についてではなく、たんに属性や種類についてにすぎない。
- 単称独立存在命題 (*free-standing singular existential propositions*)、たとえば ‘Lord Hailsham exists’ の場合、‘exist’の第1階用法はありえない。なぜなら、‘Lord Hailsham’は、個体ではなく、それ自身すなわち名前 (語) を、指示するだけだからである。
- 単称埋め込み存在命題 (*embedded singular existential propositions*)、たとえば ‘Lord Hailsham no longer exists.’や ‘Lord Hailsham might never have existed.’の場合、‘Lord

Hailsham’は個体を指示するが、‘exist’はヘイルシャム卿（個体）についての述語ではなく、じつは「存在以外の何らかの述語の充当詞」(a filler for one or other *non-existential predicate*) にすぎない。

4. ‘exist’ の「冗長説」を批判する論

さて、‘exist’を第1階述語とみなすことから生じるとされた上記の矛盾と不合理について、その妥当性への反論が提起された (Miller, 2009)。また、‘Socrates exists.’のような命題のクワイン的解釈についても批判がなされた。矛盾と不合理について、それは「存在」を属性とみなすことからではなく、「非存在」を属性とみなすことから生じると批判される。非存在をある種の実在的属性とみなすことによるのみ、ランディーの羊飼いは「存在している羊を存在していない羊から区別するために」自分の群れを調査するという不合理へと導かれ、また、非存在を実在的属性とみなすことによる、園芸家は「青いキンポウゲは一つも存在しないと結論するために、いくつかの青いキンポウゲの標本を調査」しようとする。非存在が実在的属性である場合のみ、「‘do not exist’がソクラテスについて当てはまるのは、その命題が当てはまるべきソクラテスが存在しなくなってからである」ということが矛盾に見えるのである。それゆえ、非存在を個体の実在的属性とみなすことこそ責められるべきなのに、存在を個体の実在的属性とみなすことが責められることは論点がずれている。非存在が属性であることだけを否定すればよいのに、なぜ、存在が属性であることを否定するのか？おそらく、両者は分離できないので、非存在が個体の実在的属性であることを否定すれば必ず存在もまた実在的属性であることを否定せざるをえないという信念から来るのだろう。その信念とは、「属性とはまさに述語によって表示されるものだから、‘exist’は属性を表示するが‘do not exist’は表示しないと言うことはできない」という信念であろう。存在を属性とみなすなら、非存在もまた属性とみなさなければならなくなるのではないか？このような（誤った）信念は2つの前提に基づいている。すなわち、(1)「‘Socrates does not exist’は否定存在述語を内に含む」、(2)「否定存在述語は実在的属性を表示する」である。

(1)に関して、‘Socrates does not exist’において、‘does not exist’はたしかに文法的な述語ではあるが、だからといってそれが論理的な述語でもなければならぬわけではない。その命題の論理形式は、‘It is not the case that (Socrates exists)’と解釈することも可能である。この場合、ソクラテスについて述語されていることは、(‘does not exist’ではなく) たんに‘exists’であり、命題全体が主張していることは、「『ソクラテスが存在する』は真ではない」ということである。否定単称存在命題についてのこの分析に基づくと、‘does not exist’は述語ではなく、したがってまた非存在も属性ではない。ここで用いられている区別は、「内的否定ないし述語の否定」(internal or predicate negation) と「外的否定ないし命題の否定」(external or proposi-

tional negation) の区別である。両者とも、個体 (ソクラテス) について何かが語られている。前者 ‘Socrates does not exist’ は、「ソクラテスが非存在を持っている」と言っており、後者 ‘It is not the case that (Socrates exists)’ は、「ソクラテスが存在を持っている」を否定している。第1階述語論理はそのような区別を容認しないが、だからといってそのような区別がないわけではない。たとえば、‘a is not moral’ という命題を考察しよう。それは、「a が不道徳性を持っている」 ‘a is immoral’ ということを意味するかもしれないし、「『a が道徳性を持っている』は真ではない」 ‘It is not the case that (a is moral)’ ということを意味しているのかもしれない。前者の場合、「内的 (述語の) 否定」が用いられている ‘a (is not moral)’ が、後者の場合、「外的 (命題の) 否定」が用いられている ‘It is not the case that (a is moral)’。それゆえ、もし内的否定と外的否定の区別がないなら、それら2つの解釈は同じことを意味することになるだろうが、実際には、前者は「a は不道徳的である」 ‘a is immoral’ と解釈されるが、後者は「a は不道徳的または超道徳的である」 ‘a is either immoral or amoral’ と解釈されるからである。それゆえ、内的否定と外的否定の区別がなければならない。それゆえ、‘Socrates does not exist’ が、‘Socrates (does not exist)’ と解釈されるか、‘It is not the case that (Socrates exists)’ と解釈されるかは、重要な問題なのである。矛盾や非合理を生じさせているのは、前者であって後者ではないので、後者の解釈が選択されるべきである。それゆえ、‘Socrates does not exist’ が ‘does not exist’ を論理的述語として含んでいないということは、‘It is not the case that (Socrates exists)’ という解釈から理解可能であり、そして、非存在を実在的属性と認めることなしに存在を実在的属性と認めることの可能性は依然として残されている (Miller, 2009)。

さてつぎに、‘Socrates exists’ は、‘Socrates has [the property] existence’ではなく、‘The property of *socratizing* is instantiated at least once’であるというクワインの解釈が批判される。この解釈は、存在命題における固有名 ‘Socrates’ の使用と、その固有名が指示する個体 (ソクラテス) を削除しているようにみえるが、これは誤解である。というのも、「例化」 (instantiation) という概念は、「例化されるもの」 (what is instantiated) (つまり属性) と「その例化の受け皿」 (what it is instantiated *in*) (つまり個体) という2者の関係性においてのみ意味をなすからである。すなわち、「x は y において例化される」 (x is instantiated in y) という場合、その関数はその2つのギャップ (x と y) を埋める表現によって代示されるものの観点からしか理解されえない。したがって、例化という概念を導入しても個体は除去されえない。というのも、‘socratizing’ という属性が例化されるためには、その受け皿となるべき個体 (ソクラテス) が必要だからである。それゆえ、固有名 ‘Socrates’ を削除するために提案された ‘ $\exists x (x \text{ socratizes})$ ’ という命題よりも ‘Socrates exists’ のほうが、論理的により基本的なのである。

註

- 1) 本稿における記号の使用は次のとおりとする。「 」や『 』は強調や引用のために、〈 〉や‘ ’はメタ言語的に語句そのものを表示するために、()や[]は補足説明や注記のために使用する。また、‘ ’や“ ”は強調や引用にも用いる。
- 2) cf. Quine, 1963, pp. 1-19; 1960, pp. 233-276.
- 3) cf. Heidegger, 1927.
- 4) ハイデガーは、「存在論的」と「存在者的」とを区別した。前者は、「有である限りの有」についての考察であり、後者は、「特定のカテゴリーを代表する限りの有」たとえば「質料的事物」や「知的認識者」等についての考察である。唯物論者は、存在するのはただ質料的事物のみであるとし、思考を物質に還元するが、この物質がどのように「有るのか？」については何も語らない。(cf. Inwagen, 2014, pp. 51-52)
- 5) クワインは「何が存在するのか？」を「存在論的問題」と呼んだが、インワーゲンによれば (Inwagen, 2014, p. 52)、この問はハイデガーから見れば、「存在論的」というより「存在者的」な問題として「却下 (dismiss) される」だろう。
- 6) ウィリアムズによれば (Williams, 1981, p. 1)、「What is existence?」という問いは ‘existence’ によって表示される「性質 (特質・属性) (property) についての問であるように見えるが、そもそも「存在」は性質ではないので、この問題を扱うための適切な問いは、‘What does “exist” mean?」という、‘exist’ という「語の用法を問う」問に道を譲る。
- 7) この論争の詳細について、cf. 加藤、2009年、1-19頁。
- 8) Frege, G. 1884a, S. 64: Der Ausdruck “vier edle Rosse” erweckt den Schein, als ob “vier” den Begriff “edles Ross” ebenso wie “edel” den Begriff “Ross” näher bestimme. Jedoch ist nur “edel” ein solches Merkmal; durch das Wort “vier” sagen wir etwas von einem Begriffe aus. なお、フレーゲからの用語の引用に関して、読者の便宜上、原語 (ドイツ語) ではなく英語で示した。
- 9) Frege, G. 1884a, S. 65: In dieser Beziehung hat die Existenz Aehnlichkeit mit der Zahl. Es ist ja Bejahung der Existenz nichts Anderes als Verneinung der Nullzahl. Weil Existenz Eigenschaft des Begriffes ist, erreicht der ontologische Beweis von der Existenz Gottes sein Ziel nicht. Ebenso wenig wie die Existenz ist aber die Einzigkeit Merkmal des Begriffes “Gott”.
- 10) Frege, “Dialog mit Pünjer über Existenz”, vor (*Nachgelassene Schriften und Wissenschaftlicher Briefwechsel*, I, Felix Meiner: Hamburg, 1969) (フレーゲ「存在に関するピュンジャーとの対話」中川大訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』所収、勁草書房、2001) 1884b, S. 66, [97.]: “Einige Menschen sind Deutsche” bedeutet dasselbe wie “Es gibt deutsche Menschen”. Aus dem Satz: “Sachse ist ein Mensch” folgt ebenso “Es gibt Menschen” wie aus den Sätzen “Sachse ist ein Mensch”, “Sachse ist ein Deutscher” folgt: “Einige Menschen sind Deutsche” oder “Es gibt deutsche Menschen”.
- 11) Frege, 1884b, S. 66, [98.] P. “Einige Menschen sind Deutsche” bedeutet nicht dasselbe wie “Es gibt deutsche Menschen”. Sie dürfen aus dem Satze “Sachse ist ein Mensch” allein nicht schliessen “Es gibt Menschen”, sondern Sie bedürfen dazu noch des Satzes: “Sache existiert”.
- 12) Frege, 1884b, S. 67, [99.] F. Hierauf würde ich sagen: Wenn “Sache existiert” heissen soll “Das Wort ‘Sachse’ ist nicht ein leerer Schall, sondern bezeichnet etwas”, so ist es richtig, dass die Bedingung “Sache existiert” erfüllt sein muss. Dies ist aber keine neue Prämisse, sondern die selbstverständliche Voraussetzung bei allen unseren Worten. Die Regeln der Logik setzen immer voraus, dass die gebrauchten Worte nicht leer sind, dass die Sätze Ausdrücke von Urteilen sind, dass man nicht mit

blossen Worten spiele. Sobald “Sachse ist ein Mensch” ein wirkliches Urteil ist, muss das Wort “Sachse” etwas bezeichnen und dann gebrauche ich eine weitere Prämisse nicht, um daraus zu schliessen, “Es gibt Menschen”. Die Prämisse “Sache existiert” ist überflüssig, wenn sie etwas anderes bedeuten soll, als jene selbstverständliche Voraussetzung bei allem unserem Denken.

- 13) Quine, 1963, pp. 7-8: If the notion of Pegasus had been so obscure or so basic a one that no pat translation into a descriptive phrase had offered itself along familiar lines, we could still have availed ourselves of the following artificial and trivial-seeming device: we could have appealed to the *ex hypothesi* unanalyzable, irreducible attribute of *being Pegasus* adopting, for its expression, the verb ‘is-Pegasus,’ or ‘pegasizes’
- 14) このような矛盾は、‘exist’を第1階述語ではないとみなすことによって避けられると主張された。そうみなすことによって、存在を属性とみなす最大の根拠を取り除くことになる。こうして、我々は想定された矛盾と不合理の両方を同時に回避することになる。上で見たように、フレーゲがまさにこのことをやろうとした。ラッセルは、存在を事物ではなく命題関数の属性とみなす提案によってフレーゲと同じことをした。ラッセルの提案は、‘Socrates exists’のような単称存在命題ではなく、一般存在命題に対してのみ適用される。彼は、固有名‘Socrates’を偽装された記述にすぎないとみなしたので、おそらく彼自身このような単称命題と一般命題の区別を破棄したのだろう。他方、固有名に関するラッセルの見解を共有していない人々にとっては、‘Socrates exists’は‘ $(\exists x) (x = \text{Socrates})$ ’と分析されうるというクワインの提案がある。クワインは、さらに一歩進んで‘= Socrates’という述語を変換し、固有名を含まない述語動詞‘socratizes’を考案した。こうして、‘Socrates exists’は、‘ $\exists x (x \text{ socratizes})$ ’、または「‘socratizing’という属性は少なくとも一回例化されている」と理解されることになる。もしクワインが正しいなら、単称存在命題を扱う方法‘ $(\exists x) (x = \text{Socrates})$ ’がまだ残されていることになる。それは、‘exist’を述語とみなした場合に生じる諸困難なしに、存在命題が同語反復でもなく矛盾でもないとみなす方法である。クワインの提案の利点は、基本的には、単称存在命題が一般存在命題と同じように扱うことができるということである。さらに、単称存在命題と一般存在命題で異なる‘exist’の複数の意味も必要なくなる。それどころか、‘exist’それ自体が冗長となり、量子子 $(\exists x)$ と同一性 $(=)$ によって代替可能となる。こういうわけで、クワインの理論はこの問題を簡潔明瞭に解決しているように思われる。cf. Miller, 2009.
- 15) ミラーによれば (Miller, 1975, pp. 338-54)、その見解は‘Elephants exist, but mermaids do not.’という一般存在命題には適用可能であるが、同じく一般存在命題である‘Elephants exist, but dinosaurs do not.’には適用不可能である。
- 16) すなわちその命題は、‘There is no pair of predicables of reidentification such that one of them can be truly predicated of Lord Hailsham and the other truly predicated of someone at the present moment.’と理解されるべきなのである。ここにはなお、存在の述語‘there is’が含まれているが、それは第1階ではなく第2階述語である。
- 17) ‘There is a property which was an essential property of Lord Hailsham, and it might have been the case that nothing at all ever possessed this property.’ここでウィリアムズが「本質的属性」(essential property)と呼ぶのは、たとえば being a daughter of Rosa and Manoah Bottrill であり、これは彼の母に帰されう。それについて彼は、「このように私の母の存在に本質的であるような他のものもあるかもしれない」と述べている。

参考文献

- Ayer, A.J., 1947, *Language, Truth and Logic*, 2nd ed., London (A.J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳、岩波書店、1955).
- Berto, F., 2012, *Existence as a Real Property: The Ontology of Meinongianism* (Synthese Library (356)), Dordrecht & Heidelberg & New York & London: Springer.
- Butchvarov, P., 1979, *Being qua Being*, Bloomington: Indiana University Press.
- Connell, D., 1996, *Essays in Metaphysics*, Dublin: Four Courts Press.
- Dancy, R., 1986, ‘Aristotle and Existence’, in Knuuttila & Hintikka 1986, pp. 49–80.
- Dummett, M., 1973, *Frege: Philosophy of Language*, London, Duckworth.
- Frege, G., 1884a, *Die Grundlagen der Arithmetik*, Breslau: Verlag von Wilhelm Köbner, [tr. by J. L. Austin, *The Foundations of Arithmetic*, Basil Blackwell: Oxford, 1974] (フレーゲ『算術の基礎』三平正明・土屋俊・野本和幸訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』所収、勁草書房、2001).
- Frege, G., 1884b, “Dialog mit Pünjer über Existenz”, vor *Nachgelassene Schriften und Wissenschaftlicher Briefwechsel*, I, Felix Meiner: Hamburg, 1969 (フレーゲ「存在に関するピュンジャーとの対話」中川大訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』所収、勁草書房、2001).
- Geach, P.T., 1954–1955, ‘Form and Existence’, *Proceedings of the Aristotelian Society*, 55: 251–272; reprinted in *God and the Soul*, London: Routledge & Kegan Paul, 1969, pp. 42–64
- Geach, P.T., 1968, ‘What Actually Exists’, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp. Vol. 42: 7–16.
- Gibson, Q., 1998, *The Existence Principle*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Gilson, E., 1952, *Being and Some Philosophers*, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies Press.
- Haaparanta, L., 1986, ‘On Frege’s Concept of Being’, in Knuuttila & Hintikka 1986, pp. 269–290.
- Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit* (Gesamtausgabe Bd. 2, 1971).
- Hintikka, J., 1986, ‘The Varieties of Being in Aristotle’ in Knuuttila & Hintikka 1986, pp. 81–114.
- Hintikka, J., 1986, ‘Kant, Existence, Predication and the Ontological Argument’ in Knuuttila & Hintikka 1986, pp. 249–268.
- Inwagen, P.V., 2014, *Existence: Essays in Ontology*, Cambridge Univ. Press
- Kneale, W. & Moore, G.E., 1936, “Symposium: Is Existence a Predicate? I By W Kneale, II By G.E. Moore”, *Aristotelian Society, Supplementary Volume* 15, pp. 154–188.
- Knuuttila, S. & Hintikka, J., 1986, *The Logic of Being*, Dordrecht: Reidel.
- Londey, D.G., 1970, “Existence”, *Philosophia Arhusiensis* 1.
- MacIntyre, A., 1967, “Ontology”, in *The Encyclopedia of Philosophy*, ed. P. Edwards, 8 vols., N.Y. and London: Macmillan and the Free Press, volume v, pp. 542–3.
- Mackie, J., 1976, ‘The Riddle of Existence’, *Proceedings of the Aristotelian Society*, Supp. Vol. 50: 247–266.
- Miller, B., 1975, ‘In Defence of the Predicate “Exists”’, *Mind*, 84: 338–354.
- Miller, B., 2002, *The Fullness of Being—A New Paradigm for Existence*, Univ. of Notre Dame Press: Notre Dame, Indiana.
- Miller, B., 2009, “Existence,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Edward N. Zalta (ed.), URL <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2009/entries/existence/>>, (First published Thu Aug 22, 1996;

substantive revision Fri May 24, 2002).

- Munitz, M., 1974, *Existence and Logic*, New York: New York University Press.
- Parsons, T., 1980, *Nonexistent Objects*, New Haven: Yale University Press.
- Pears, D., 1967, 'Is Existence a Predicate?', in P. Strawson, (ed.), *Philosophical Logic*, Oxford: Oxford University Press, pp. 97-102.
- Quine, W.V.O., 1963, 'On What There Is' in his *From a Logical Point of View*, New York: Harper and Row, pp. 1-19.
- Quine, W.V.O., 1960, *Word and Object*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Russell, B., 1905, 'On Denoting', reprinted in R. C. Marsh (ed.), *Logic and Knowledge*, London: Allen and Unwin, 1968.
- Weidemann, H., 1986, 'The Logic of Being in Thomas Aquinas' in Knuutilla & Hintikka 1986, pp. 181-200.
- Williams, C. J. F., 1981, *What is Existence?*, Oxford: Oxford University Press.
- Williams, C. J. F., 1992, *Being, Identity, and Truth*, Oxford: Oxford University Press.
- Zalta, E., 1988, *Intensional Logic and the Metaphysics of Intentionality*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 加藤雅人、2009年、「存在は述語か？—W.KnealeとG.E.Mooreの論争（1936）」、『哲学』関西大学哲学会、第27号、1-19頁。
- 加藤雅人、2017年、「存在命題の意味論的分析—フレーゲ再考」『関西大学外国語学部紀要』第17号、35-51頁。